

2022 令和4年度

拉致問題の解決 その他北朝鮮当局による 人権侵害問題への対処に関する 政府の取組についての報告

この文書は、拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する法律（平成18年法律第96号。以下「法」という。）第5条の規定に基づき、拉致問題の解決その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する令和4年度の政府の取組について報告するものである。



INDEX

1. 総論
2. 拉致問題
 - 国内における取組
 - 日朝協議及び六者会合
 - 国際場裡における取組
 - 各国との連携
3. 脱北者問題
4. その他の人権侵害問題
 - 日本人配偶者問題
 - 北朝鮮内の人権侵害問題に関する国際社会の動き

外務省

1

総論

北朝鮮による拉致を始めとする人権侵害問題は国際社会の重大な懸念事項であり、政府は様々な取組を行っている。特に、拉致問題は、我が国の主権と国民の生命・安全に関わる重大な問題であり、基本的人権の侵害という国際社会全体の普遍的な問題である。また、拉致問題は、時間的な制約のある人道問題である。政府としては、拉致問題を国の責任において解決すべき喫緊の重要課題と位置付け、拉致問題の解決なくして北朝鮮との国交正常化はあり得ないとの方針を堅持し、拉致被害者としての認定の有無にかかわらず、全ての拉致被害者の安全確保及び即時帰国のために全力を尽くすとともに、拉致に関する真相究明、拉致実行犯の引渡しを引き続き追求している。また、各種国際会議や各国との首脳会談を始めとする外交上のあらゆる機会を捉えて拉致問題を提起してきており、拉致問題解決の重要性とそのための政府の取組は、諸外国から幅広い理解と支持を得てきている。

しかしながら、政府が認定している北朝鮮による日本人拉致被害者17名のうち、12名がいまだに帰国していない。北朝鮮は、平成26(2014)年5月にストックホルムで行われた日朝政府間協議の結果、拉致被害者及び行方不明者を含む全ての日本人に関する包括的かつ全面的な調査の実施を約束し、同年7月に調査を開始した。ところが、北朝鮮による平成28(2016)年1月の核実験や同年2月の弾道ミサイル発射等を受けた我が国の対北朝鮮措置の発表後の同月、北朝鮮は拉致被害者を含む全ての日本人に関する調査を全面中止し、特別調査委員会を解体すると宣言した。

拉致問題は岸田内閣の最重要課題であり、政府としては、引き続き、北朝鮮に対して平成26(2014)年5月の日朝政府間協議における合意(以下「ストックホルム合意」という。)の履行を求めつつ、拉致問題の即時解決に向けて全力を尽くしていく。

以下では、まず、拉致問題^{じょうり}に関して、国内における取組、日朝協議及び六者会合、国際場裡^{じょうり}における取組、さらに、各国との連携につき俯瞰^{ふかん}する。次いで、脱北者問題に関する政府の取組を説明し、最後に、北朝鮮によるその他の人権侵害問題の現状につき概観することとする。



第211回国会施政方針演説において拉致問題の解決に向けた決意を述べる
岸田内閣総理大臣(令和5(2023)年1月)(内閣広報室提供)

2

拉致問題

(1) 国内における取組

(ア) 政府一体となった取組

平成25(2013)年1月、政府は、拉致問題に関する対応を協議し、同問題の解決のための戦略的取組及び総合的対策を推進するため、内閣に新たな「拉致問題対策本部」を設置した。同対策本部は、本部長である内閣総理大臣を始め、副本部長である拉致問題担当大臣、内閣官房長官及び外務大臣、そして本部員である他の全ての国務大臣から構成され、拉致問題の解決に向け、政府一体となった取組を推進している。

第1回拉致問題対策本部会合では、拉致問題の解決に向けた方針(※1)が決定され、その方針の下、各閣僚が、本部長及び副本部長を中心に連携を密にし、8つの項目(※2)について、

それぞれの責任分野において全力を尽くすことが確認された。これまで計3回の拉致問題対策本部会合が開催され、本部長と副本部長によるコア会合においては北朝鮮当局によって拉致された被害者等の支援に関する法律(平成14年法律第143号。以下「支援法」という。)のフォローアップや情報共有を行ってきている。平成26(2014)年8月の第2回拉致問題対策本部会合で報告された「拉致被害者等への今後の支援策の在り方について(中間報告)」を受け、議員立法により支援法が改正され、同年11月の第3回拉致問題対策本部会合において「拉致被害者・家族に対する総合的な支援策について」の改訂が承認された。これらの取組により、既帰国拉致被害者に対する支援の継続及び今後の拉致被害者帰国に向けた準備に遺漏なきを期した。

注) 文中に記載の※印(注釈)につきましては、P 6に説明を記載しています。

(イ) 北朝鮮に対する措置の実施

政府は、拉致、核、ミサイルといった諸懸案に対する北朝鮮の対応や国際社会の動き等を踏まえ、国連安保理決議に基づく措置に加えて、これまで一連の対北朝鮮措置(※3)を決定し、実施してきた。

北朝鮮による全ての大量破壊兵器及びあらゆる射程の弾道ミサイルの完全な、検証可能な、かつ、不可逆的な廃棄に向け、国際社会が一致結束して、国連安保理決議を完全に履行することが重要である。日本は、海上保安庁による哨戒活動及び自衛隊による警戒監視活動の一環として、国連安保理決議違反が疑われる船舶の情報収集を行っている。国連安保理決議で禁止されている北朝鮮船舶との「瀬取り」(洋上での物資の積替え)を実施しているなどの違反が強く疑われることが確認された場合には、国連安保理北朝鮮制裁委員会等への通報、関係国への関心表明、対外公表などの措置をとってきている。

(ウ) 拉致問題に関する理解促進

拉致問題に関する理解促進について、法は、政府及び地方公共団体が、拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題に関する国民世論の啓発を図るよう努めるものと定めている。政府は、これまでのパンフレット等の制作・頒布、学校における説明等に加え、「拉致被害者御家族ビデオメッセージ～必ず取り戻す!愛する家族へ～」を制作・上映している。平成30(2018)年7月には、各都道府県・政令指定都市の首長に対し、自治体広報誌において拉致問題を取り上げること等を促す通知を拉致問題担当大臣名で発出し、協力を要請した。また、拉致問題対策本部と関係地方公共団体等との共催による啓発行事「拉致問題を考える国民の集い」を令和4(2022)年度は全国3か所で実施するとともに、映画「めぐみー引き裂かれた家族の30年」、アニメ「めぐみ」及び「拉致被害者御家族ビデオメッセージ」の上映会を全国各地(同年度は25か所)で開催した。さらに、舞台劇「めぐみへの誓いー奪還ー」を同年度は全国9か所で上演するなど、啓発の一層の強化に取り組んでいる。

特に、これまで拉致問題について触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題であるとの観点から、平成29(2017)年度から、中高生を対象とした作文コンクールを実施している。また、SNSを活用した発信の多様化に取り組んでいる。令和4(2022)年度には、拉致問題対策本部電子図書館を開設し、電子コミック「母が拉致された時 僕はまだ1歳だった」を教育現場に無償貸与する取組を開始するとともに、作文コンクールの題材として、これまでのアニメ「めぐみ」のほか、同電子コミックを追加し、これについての若年層向け動画広告を各種SNSに掲載する取組を行った。さらに、平成30(2018)年度から「拉致問題に関する教員等研修」を実施しており、令和4(2022)年度は、拉致問題の概要説明、授業実践発表、拉致被害者御家族及び帰国拉致被害者の講演を内容とするオンライン研修並びに拉致現場視察、学習指導案の作成及び帰国拉致被害者との懇談等を内容とする実地研修を実施した。授業実践発表のうち

反響の多かった授業については授業を収録し、教員の研修用として学校現場へのDVDの貸出を行っている。くわえて、令和元(2019)年度から、初等中等教育に携わる教員を目指す大学生を対象に、拉致被害者御家族及び帰国拉致被害者の講演、学習指導案の作成、模擬授業の実施等を通じて授業で拉致問題を取り上げるための教授能力を身につける講座を大学と共同で開設しており、令和4(2022)年度は香川大学と共同で実施した。また、同年11月に、小学生・中学生向けに「こども向けパンフレット」を制作した。

さらに、拉致問題対策本部公式Twitterアカウントにおいて、拉致問題に関する様々な情報をタイムリーにツイートするとともに、YouTube拉致問題対策本部公式動画チャンネルでは、アニメ「めぐみ」や拉致被害者御家族等のメッセージ動画、NHK WORLDで放送した拉致問題に関する海外向け番組等を配信しているほか、国際シンポジウム、国民の集いなどのイベントをライブ配信するなど、拉致問題に関する発信を強化した。こうした取組に加え、教育現場への拉致問題対策本部事務局職員の派遣や、アニメ「めぐみ」の教育現場での積極的活用を促すなどの取組を実施している。

日本政府は、例年5月に、国連本部において、米国、豪州、EUと共催で、拉致問題に関する国際シンポジウムを開催してきたが、令和4(2022)年6月には、米国、豪州及びEUとの共催で、オンライン国連シンポジウムを開催し、日本の拉致被害者御家族を含めた当事者からの「生の声」を国際社会に訴えるとともに、各国の北朝鮮問題の専門家によるパネルディスカッションを行い、拉致問題の一刻も早い解決に向けて国際社会の理解と協力を呼び掛けた。このほかにも、政府は、北朝鮮向けラジオ放送を通じて、拉致被害者等に向けて、政府の取組や国内外の情勢に関する情報、さらには、御家族の声や励ましのメッセージを送信しているほか、民間団体に業務委託し、その運営する北朝鮮向けラジオ放送の中でも政府メッセージを送信している。このほか、平成27(2015)年度以降、同民間団体と共同で北朝鮮向けラジオ放送の共同公開収録を全国各地で実施している。くわえて、海外の北朝鮮向けラジオ放送局とも連携し、北朝鮮向けラジオ放送の充実・強化に取り組んでいる。

(エ) 北朝鮮人権侵害問題啓発週間

法は、12月10日から16日までを「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」と定めている。令和4(2022)年度は、政府主催イベントとして、12月10日に、拉致問題対策本部と法務省の共催、外務省と文部科学省の後援による国際シンポジウム「グローバルな課題としての拉致問題の解決に向けた国際連携」を東京都千代田区において開催した。同シンポジウムでは、北朝鮮による拉致問題の実態と御家族の苦悩について、被害者の御家族からの「生の声」の訴えが行われたほか、エリサベス・サルモン国連北朝鮮人権状況特別報告者及び李信和(イ・シンファ)韓国政府北朝鮮人権国際協力大使が登場し、拉致問題の解決に向けた国際連携について議論がなされた。また、当該政府主催イベントの中で、中学生及び高校生を対象とする北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール



久米 裕さん



松本 京子さん



横田 めぐみさん



田中 実さん



田口 八重子さん



市川 修一さん



増元 るみ子さん



曾我 ミヨシさん



石岡 亨さん



松木 薫さん

原 敎晃さん
ただあき

有本 恵子さん



地村 保志さん



地村 富貴恵さん



蓮池 薫さん



蓮池 祐木子さん



曾我 ひとみさん

日本政府在拉致被害者として認定している17名

の表彰式を行い、松野内閣官房長官兼拉致問題担当大臣から受賞者への表彰状の授与、最優秀受賞者による作文の朗読や拉致現場視察(新潟市)の感想の発表が行われた。そのほか、関係府省庁、地方公共団体等においても、同週間を中心に講演会、パネル展、ポスターの掲出、チラシ等の配布、インターネットバナー広告及び交通広告(電車中吊り)の実施、全国の地方新聞紙における広告の掲載等に取り組んだ。

(オ) 拉致被害者の認定及び拉致容疑事案等の捜査・調査の推進

平成14(2002)年9月17日の日朝首脳会談において、北朝鮮は日本人の拉致を初めて認めた。政府は、これまでに北朝鮮による日本人拉致被害者として、17名を認定している(令和5(2023)年3月末現在)。この17名以外にも、警察は、朝鮮籍の姉弟が日本国内から拉致された事案1件2名を、北朝鮮による拉致容疑事案と判断している。また、これまで、拉致に関与したとして北朝鮮工作員等8件に係る11名について逮捕状の発付を得て国際手配を行っている。

これら以外にも、いわゆる特定失踪者(※4)も含め、北朝鮮による拉致の可能性を排除できない事案として警察が捜査・調査の対象としている方は871名に上っており(令和5(2023)年3月末現在)、警察では、当該事案の真相解明に向け、警察庁警備局外事情報部外事課に設置した「特別指導班」が、都道府県警察を巡回・招致して、捜査・調査の担当官への具体的な指導、当該事案の現場の实地調査、都道府県警察間の協力体制の構築等を行った。また、海難事案として処理されているものについても、海上保安庁との連携を密にして、捜査・調査を行った。

また、将来、北朝鮮から拉致被害者に関連する資料が出てきた場合に備え、御家族の意向等を勘案しつつ、積極的にDNA型鑑定資料の採取を実施してきているほか、広く国民からの情報提供を求めるため、御家族の同意が得られたものについては、事案の概要等を警察庁及び都道府県警察のホームページに掲載している。

(2) 日朝協議及び六者会合

(ア) 日朝協議

日朝関係について、政府は、日朝平壤宣言に基づき、拉致、核、ミサイルといった諸懸案を包括的に解決し、不幸な過去を清算して、国交正常化を目指す考えである。

北朝鮮による平成28(2016)年1月の核実験及び同年2月の弾道ミサイル発射等を受けた我が国の対北朝鮮措置の発表後の同月、北朝鮮は拉致被害者を含む全ての日本人に関する調査を全面中止し、特別調査委員会を解体すると宣言した。我が国は北朝鮮に対し、厳重に抗議し、ストックホルム合意を破棄する考えはないこと、北朝鮮が同合意に基づき、一日も早く全ての拉致被害者を帰国させるべきことについて、強く要求した。

政府としては、引き続き、北朝鮮に対してストックホルム合意の履行を求めつつ、一日も早い全ての拉致被害者の帰国を実現すべく、全力で果敢に取り組んでいく。

平成30(2018)年2月の平昌冬季オリンピック競技大会の開会式のレセプションの機会を捉えて、安倍内閣総理大臣は金永南(キム・ヨンナム)北朝鮮最高人民会議常任委員長に対して、拉致問題、核・ミサイル問題を取り上げ、日本側の考えを伝えた。特に、全ての拉致被害者の帰国を含め、拉致問題の解決を強く申し入れた。

令和5(2023)年1月、岸田内閣総理大臣は、国会における施政方針演説で、「北朝鮮による前例のない頻度と態様での弾道ミサイル発射は、断じて容認できません。日朝平壤宣言に基づき、拉致、核、ミサイルといった諸懸案を包括的に解決し、不幸な過去を清算して、日朝国交正常化の実現を目指します。中でも、最重要課題である拉致問題は深刻な人道問題であり、その解決は、一刻の猶予も許されません。全ての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく、あらゆるチャンスを逃すことなく、全力で果敢に取り組みます。私自身、条件を付けずに金正恩委員長と直接向き合う決意です。」と表明した。

(イ) 六者会合

六者会合は、朝鮮半島の非核化を始めとする北朝鮮をめぐる諸懸案を解決するための交渉の場として活用されてきたが、平成20(2008)年12月以来開催されていない。平成17(2005)年9月に発出された六者会合共同声明においては、拉致問題を含めた懸案事項を解決することを基礎として、日朝間の国交を正常化するための措置をとることとされており、この共同声明の完全な実施が重要である。政府としては、米国や韓国、さらには関係国と緊密に連携しつつ、北朝鮮に対し、六者会合共同声明の完全実施に向けた具体的行動をとるよう引き続き求めていく考えである。

じょうり (3) 国際場裡における取組

拉致問題の解決のためには、我が国が主体的に北朝鮮に対して強く働き掛けることはもちろん、拉致問題解決の重要性について各国及び国際社会からの理解と協力を得ることが不可欠であり、政府は、外交上のあらゆる機会を捉え、拉致問題を提起している。

令和4(2022)年4月の国連人権理事会、同年12月の国連総会本会議及び令和5(2023)年4月の国連人権理事会において、EUが提出し、我が国が共同提案国となった、拉致問題への言及を含む強い内容の北朝鮮人権状況決議(※5)が無投票で採択された。また、令和4(2022)年12月には、安保理において北朝鮮の人権状況について協議が行われ、我が国もオブザーバーとして出席した。その後、我が国を含む有志国は、拉致問題等の解決及び拉致被害者等の即時帰国を強く要求するとの内容を含む共同ステートメントを発出した。

政府は、国連のみならず、G7サミット、日米韓首脳会合、日米豪印首脳会合、ASEAN関連首脳会議などの多国間の枠組みにおいても、拉致問題を提起しており、拉致問題解決の重要性とそのための政府の取組は、国際社会から広範な理解と支持を得てきている。また、令和4(2022)年9月の国連総会の際にも、岸田内閣総理大臣の一般討論演説等において、「私自身、条件を付けずに金正恩委員長と直接向き合う決意である。」と改めて表明した。



G7エルマウ・サミット(令和4(2022)年6月)(内閣広報室提供)

(4) 各国との連携

上記のような多国間の枠組みにおける働き掛けと並行して、政府は、諸外国との首脳・外相会談などにおいても、拉致問題に関する我が国の立場を説明し、理解と支持を得てきている。

米国については、トランプ大統領が、安倍内閣総理大臣からの要請を受け、平成30(2018)年6月の米朝首脳会談において金正恩(キム・ジョンウン)国務委員長に対して拉致問題を取り上げた。また、平成31(2019)年2月の第2回米朝首脳会談では、トランプ大統領から金正恩国務委員長に対して初日の最初に行った一対一の会談の場で拉致問題を提起し、拉致問題についての安倍内閣総理大臣の考え方を明確に伝えたほか、その後の少人数夕食会でも拉致問題を提起し、首脳間での真剣な議論が行われた。また、令和4(2022)年1月の日米首脳テレビ会談、5月の日米首脳会談、10月の日米首脳テレビ会談、11月の日米首脳会談、令和5(2023)年1月の日米首脳会談において、岸田内閣総理大臣からバイデン大統領に対して、拉致問題の解決に向けた米国の引き続きの理解と協力を求め、バイデン大統領から、全面的な支持を得た。令和4(2022)年5月の訪日の際には、バイデン大統領は、拉致被害者の御家族と面会し、拉致被害者を思う御家族の方々の心情や、拉致問題の一刻も早い解決に向けた米国の支援を求める発言にじっくりと真剣に耳を傾け、御家族の方々に励まし、勇気付けた。

令和4(2022)年9月には尹徳敏(ユン・ドクミン)次期駐日韓国大使が、同年12月にはエリサベス・サルモン国連北朝鮮人権状況特別報告者及び李信和(イ・シンファ)韓国政府北朝鮮人権国際協力大使が、それぞれ拉致被害者の御家族と面会を行い、拉致問題の即時解決に向けての協力を表明した。

中国についても、令和元(2019)年6月の日中首脳会談において、習近平(しゅう・きんぺい)国家主席から、同月の中朝首脳会談で日朝関係に関する日本の立場、安倍内閣総理大臣の考えを金正恩国務委員長に伝えたとの発言があり、その上で、習近平国家主席から、拉致問題を含め、日朝関係改善への強い支持を得た。また、令和3(2021)年10月の日中首脳電話会談においても、岸田内閣総理大臣から習近平国家主席に対して拉致問題を含む北朝鮮への対応について提起し、引き続き



バイデン大統領と拉致被害者御家族の面会(令和4(2022)年5月)(内閣広報室提供)

日中が連携していくことを確認した。

また、韓国についても、令和4(2022)年10月の日韓首脳電話会談、同年11月の日韓首脳会談及び令和5(2023)年3月の日韓首脳会談において、岸田内閣総理大臣から拉致問題の解

決に向けた韓国の引き続きの理解と協力を求め、尹錫悦(ユン・ソンニョル)大統領から改めて支持を得た。

日本は、今後とも、米国を始めとする関係国と緊密に連携・協力しつつ、拉致問題の即時解決に向けて全力を尽くしていく。

3

脱北者問題

北朝鮮を脱出した脱北者は、中国、モンゴル、タイ、ラオスなどのアジア諸国に滞在していると見られ、中国に最も多くの脱北者がいるものと考えられているが、そのほとんどは、滞在国当局の取締りや北朝鮮への強制送還等を逃れるために潜伏生活を送っていることから、実数の把握は極めて困難である。

政府は、脱北者の保護及び支援については、法の趣旨を踏まえ、人道上の配慮、関係者の安全、脱北者の滞在国との関係などを総合的に勘案しつつ対応してきている。脱北者が日本国籍を有する者である場合には、邦人保護の見地から当該者をしかるべく保護して、その安全を図っている。また、元在日朝鮮人等

の場合には、個々の事案に係る事情を具体的に検討した上で判断するとの方針に基づき対処している。政府としてこれまでに関知している範囲では、100名を超える脱北者が我が国に入国している。

また、政府としては、我が国に帰国し、又は入国した脱北者が自立した生活を送ることができる環境を早期に整えることが肝要であると考えており、関係府省庁の緊密な連携の下、定着支援のための施策を円滑かつ迅速に実施しているところである。具体的には、脱北者に対し、個別のケースに応じて、職業相談、精神的なケアの実施、日本語教育機関の紹介等を行っている。

4

その他の人権侵害問題

(1) 日本人配偶者問題

過去に朝鮮半島出身者である夫等に随伴して北朝鮮に渡航した日本人配偶者の方々の安否確認及び故郷訪問についても、人道的観点から取り組むべき問題である。昭和34(1959)年から昭和59(1984)年まで行われた在日朝鮮人等の帰還事業により北朝鮮に渡航した日本人配偶者と推定される1,831名に関し、政府としては、従来から、北朝鮮側に対し安否調査の要請等を行ってきた。平成26(2014)年10月の平壤における特別調査委員会との協議においては、日本人配偶者の調査方法等についての説明があったが、具体的な情報を含む調査結果の通報はなかった。政府としては、引き続き北朝鮮に対して、迅速な調査及び結果の通報を強く求めていく。

(2) 北朝鮮内の人権侵害問題に関する国際社会の動き

平成26(2014)年3月に国連人権理事会に提出された北朝鮮における人権に関する国連調査委員会(COI)の最終報告書で

は、思想、表現及び宗教の自由の侵害、差別、移動及び居住の自由の侵害、食料への権利及び生存権の侵害、恣意的拘禁、拷問、処刑及び強制収容所、拉致及び強制失踪など、北朝鮮における広範囲にわたる組織的かつ深刻な人権侵害が詳述されており、また、COIが人権侵害と認める事案の多くは「人道に対する犯罪」に相当するとしている。同報告書のフォローアップを目的として、平成27(2015)年6月には、国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)ソウル事務所が設立され、その後も、北朝鮮における人権侵害に係る説明責任の問題に重点的に取り組む独立した専門家の指名(平成28(2016)年9月)、ソウル事務所を含むOHCHRの能力強化(平成29(2017)年3月～現在)といった具体的な取組が進められている。政府としては、拉致問題の即時解決のため、国連北朝鮮人権状況特別報告者やOHCHRの現地事務所の活動に協力していく。

また、米国国務省や国連事務総長及び北朝鮮人権状況特別報告者等が作成した報告書においても、北朝鮮内における広範な人権侵害が指摘されている。政府としては、北朝鮮が国際社会の声を真摯に受け止め、拉致問題の即時解決や、国際社会との協力に向け具体的な行動をとるよう、引き続き強く求めていく。

注 釈

- ※1 北朝鮮による拉致問題は、我が国の主権及び国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、国の責任において解決すべき喫緊の重要課題である。政府としては、拉致問題の解決なくして北朝鮮との国交正常化はあり得ないとの方針を堅持し、拉致被害者としての認定の有無にかかわらず、全ての拉致被害者の安全確保及び即時帰国のために全力を尽くす。また、拉致に関する真相究明、拉致実行犯の引渡しを引き続き追求していく。
- ※2 ①早期の解決に向けた北朝鮮側の行動を引き出すため、更なる対応措置について検討するとともに、現行法制度の下での厳格な法執行を推進する。②日朝政府間協議を始め、あらゆる機会を捉え、北朝鮮側による拉致問題の解決に向けた具体的な行動への継続した強い要求を行う。③拉致被害者及び北朝鮮情勢に係る情報収集・分析・管理を強化する。④拉致の可能性を排除できない事案に係る捜査・調査を徹底するとともに、拉致実行犯に係る国際捜査を含む捜査等を継続する。⑤拉致問題を決して風化^{しょうり}させないとの決意を新たにし、教育現場を含む国内地域各層及び各種国際場裡における様々な場を活用して、内外世論の啓発を一層強化する。⑥米国、韓国を始めとする関係各国との緊密な連携及び国連を始めとする多国間の協議を通じて、国際的な協調を更に強化する。⑦拉致被害者家族等へのきめ細やかな対応、既帰国拉致被害者に対する支援の継続及び今後の拉致被害者帰国に向けた準備に遺漏なきを期する。⑧その他拉致問題の解決に資するあらゆる方策を検討する。
- ※3 平成18(2006)年7月5日の北朝鮮によるミサイル発射を受け、万景峰92号の入港禁止を含む9項目の対北朝鮮措置を即日実施し、同年10月9日の北朝鮮による核実験実施の発表を受け、同月11日、全ての北朝鮮籍船舶の入港禁止及び北朝鮮からの輸入禁止を含む4項目の対北朝鮮措置を発表した。
- 平成21(2009)年には、4月5日の北朝鮮によるミサイル発射を受け、同月10日に北朝鮮を仕向地とする支払手段等の携帯輸出について届出を要する金額(下限額)を100万円超から30万円超に引き下げること、北朝鮮に住所等を有する自然人等に対する支払について報告を要する金額(下限額)を3,000万円超から1,000万円超に引き下げることを発表した。また、5月25日の北朝鮮による核実験実施を受け、6月16日に北朝鮮への輸出禁止並びに「北朝鮮の貿易・金融措置に違反し刑の確定した外国人船員の入陸」及び「そのような刑の確定した在日外国人の北朝鮮を渡航先とした再入国」を原則として許可しないことを発表した。国際連合安全保障理事会決議第千八百七十四号等を踏まえ我が国が実施する貨物検査等に関する特別措置法(平成22年法律第43号)については、平成22(2010)年5月28日に成立した。
- 平成22(2010)年には、3月の韓国哨戒艦沈没事件を受け、①北朝鮮を仕向地とする支払手段等の携帯輸出について、届出を要する下限額を30万円超から10万円超に引き下げること、②北朝鮮に住所等を有する自然人等に対する支払について報告を要する下限額を1,000万円超から300万円超に引き下げること、③(北朝鮮に係る輸出入禁止)措置の執行に当たり、第三国を経由する迂回輸出入等を防ぐため、関係省庁間の連携を一層緊密にし、更に厳格に対応していくことを発表した。
- 平成25(2013)年4月5日、北朝鮮の核関連、その他の大量破壊兵器関連及び弾道ミサイル関連計画等に関与する者として、追加的に1団体及び4個人に対して資産凍結などの措置を講じたことを発表した。さらに、同年8月30日、北朝鮮が、国際社会の強い反対にもかかわらず、依然として核・ミサイル開発を継続し、拉致問題について何ら具体的な行動を見せていないこと等を踏まえ、9団体及び2個人を資産凍結の対象として追加的に指定することを発表した。
- 平成26(2014)年5月の日朝政府間協議の結果、北朝鮮側が全ての日本人に関する包括的かつ全面的な調査を実施することを約束し、同年7月、特別調査委員会を立ち上げ、調査を開始したことを受け、我が国は、①北朝鮮籍者の入国の原則禁止措置、在日の北朝鮮当局職員による北朝鮮を渡航先とした再入国の原則禁止措置、日本人に対する北朝鮮への渡

航自粛要請措置等を解除すること、②北朝鮮に住所等を有する自然人等に対する支払について、報告を要する下限額を300万円超から3,000万円超に戻すとともに、北朝鮮を仕向地とする支払手段等の携帯輸出について、届出を要する下限額を10万円超から100万円超に戻すこと、③人道物資輸送のために北朝鮮籍船舶が我が国に入港する場合を、特定船舶の入港の禁止に関する特別措置法(平成16年法律第125号)第6条第1項に規定する入港禁止の例外となる「特別の事情」に該当する場合であると閣議決定すること(輸出入全面禁止措置は維持)を内容とする対北朝鮮措置の一部解除を決定した。

平成28(2016)年2月、北朝鮮が同年1月に核実験を、同年2月に「人工衛星」と称する弾道ミサイル発射を強行したことを受け、また、拉致問題について、安倍内閣の最重要課題として、一日も早い全ての拉致被害者の帰国を求めてきたが、いまだに解決に至っていないことを踏まえ、我が国は、拉致、核、ミサイルといった諸懸案を包括的に解決するため、①在日外国人の核・ミサイル技術者の北朝鮮を渡航先とした再入国禁止を含め、従来より対象者を拡大して人的往来の規制措置を実施すること、②支払手段等の携帯輸出について届出を要する下限額を引き下げるとともに、北朝鮮向けの送金を原則として禁止すること、③人道目的の船舶を含む全ての北朝鮮籍船舶の入港を禁止するとともに、北朝鮮に寄港した第三国籍船舶の入港を禁止すること、④資産凍結の対象となる関連団体・個人を拡大することを内容とする独自の対北朝鮮措置の実施を決定した。また、同年9月に北朝鮮が同年に入ってから2回目となる核実験を強行するとともに、同年中に20発以上の弾道ミサイルを発射していることや、拉致問題について一日も早い全ての拉致被害者の帰国を求めてきたにもかかわらず、いまだに解決に至っていないことといった北朝鮮をめぐる情勢を踏まえ、同年12月、人的往来の規制措置を強化するとともに、北朝鮮に寄港した日本籍船舶の入港禁止措置及び資産凍結等の対象となる関連団体・個人の追加指定を実施することとした。

さらに、平成29(2017)年には、北朝鮮が3発の大陸間弾道ミサイル(ICBM)級を含む17発の弾道ミサイルを発射したほか、同年9月には過去最大出力と推定される規模の6回目の核実験を実施した。こうした中、同年7月、8月、11月及び12月には、対北朝鮮措置として、北朝鮮の核・ミサイル開発などに関与した団体・個人を資産凍結等の対象として追加指定した。

北朝鮮は、令和4(2022)年には、日本の上空を通過するものや複数のICBM級弾道ミサイルを含め、31回、少なくとも59発に及び弾道ミサイルの発射などを行った。北朝鮮による挑発行為などを受けて、同年4月、10月、12月及び令和5(2023)年3月に、対北朝鮮措置として、北朝鮮の核・ミサイル開発などに関与した団体・個人を資産凍結等の対象として追加指定した。

※4 特定失踪者とは、民間団体である「特定失踪者問題調査会」が独自に北朝鮮による拉致の可能性の調査の対象としている失踪者のことを意味する。

※5 同決議は、拉致被害者及び家族が高齢化している中、深刻な人権侵害を伴う国際的な拉致問題及び全ての拉致被害者の即時帰国の緊急性及び重要性を深刻な懸念をもって改めて強調し、拉致被害者及び家族が長きにわたり繰り返される多大な苦しみ、並びに強制的失踪作業部会からの複数回の情報提供要請に対して同一かつ実質的な内容がない回答をする等北朝鮮が何ら具体的かつ前向きな行動をとっていないことに対し深刻な懸念を表明し、北朝鮮に対し、全ての強制失踪の申立てへの対処に当たり、拉致被害者及びその家族に真摯に耳を傾け、即座にその被害者の家族に対する失踪者の安否及び所在に関する正確、詳細かつ完全な情報の誠実な提供及び全ての拉致被害者に関する全ての問題の即時の解決、特に全ての日本人拉致被害者の即時帰国の実現を改めて強く要求する内容となっている。

外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

TEL:03-3580-3311

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/>

